

【演題;8】

臨床研究

入退院を繰り返す末期慢性心不全患者に対する外来点滴療法の可能性

～当院における 15 年の施行経験より～

兵庫県立尼崎病院 循環器内科

西 清人、佐藤 幸人、宮本 忠司、当麻 正直、谷口 良司、福原 怜

西城 さやか、後藤 太祐、高橋 由樹、棚田 洋平、山本 絵里香

佐和 琢磨、清中 崇司、藤原 久義、鷹津 良樹

【背景】BNP モニタリングや看護師による電話指導など、慢性心不全患者の入院を回避する様々な試みが近年報告されている。静注心不全治療薬の間欠投与（外来点滴療法）もそのひとつであるが、QOL 改善効果などが報告されているものの、安全性や入院回避効果については不明である。

【方法】当院では、入退院を繰り返す末期慢性心不全患者に対する外来点滴療法を、1995 年 から検討している。2000 年 5 月以降についてはデータベース化しており、そのデータベースを基に解析をおこなった。

【結果】(1)計 26 人に対して延べ 543 回点滴療法を施行した。カルペリチド(平均 0.032 γ)、オルプリノン(平均 0.11 γ)、カテコラミン(ドパミンまたはドブタミン、平均 3.9 γ)を約 4 時間点滴し、静注フロセミドを併用した。(2)いずれの薬剤においても不整脈の増加や過度の血圧変動は認めず、途中中断例もなかった。(3)システムが整備された 2005 年 4 月以降の 12 例について、外来点滴導入前後で月あたりの入院日数が 6.5 \pm 3.0 日/月から 2.2 \pm 1.8 日/月へと有意に減少した(p=0.0076)。また、入院回数は 0.35 \pm 0.13 回/月から 0.25 \pm 0.30 回/月へ約 30% (p=0.13)の、保険点数は 20148 \pm 9267 点/月から 10250 \pm 7100 点/月へ約 49%(p=0.059)の減少傾向をそれぞれ示した。

【結論】末期慢性心不全患者に対する外来点滴療法は安全に施行でき、入院日数を有意に抑制した。また医療費抑制の可能性も示唆された。